

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25590130

研究課題名(和文)アジア人障害者の適応とIL運動の海外への土着化についての研究

研究課題名(英文) A study of a cross-cultural adjustment of trainees with disabilities and localizing of IL movements

研究代表者

岩隈 美穂 (Iwakuma, Miho)

京都大学・医学(系)研究科(研究院)・准教授

研究者番号：60512481

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：13人の研究協力者にインタビューを行った。日本の先進国としての生活スタイル、インターネットを通じての母国とのつながりの保持、日本にはさまざまな外国人たちが多様な目的で来日、長期・短期に渡って滞在し、受け入れ社会についての知識などが、研究参加者の適応に大きな影響を与えていることが明らかになった。さらに研究参加者たちの適応には、身体的、社会的、態度的レベルがあることも本研究で示された。

研究成果の概要(英文)：This study aims to examine the cross-cultural adjustment processes of trainees with disabilities from Asia-Pacific regions, with the aim to explore factors that influence cross-cultural adjustments and uncover difficulties experienced by individuals with disabilities. We interviewed a total of 13 trainees, some of whom were interviewed multiple times. Several factors (e.g., affluence of the Japanese lifestyle, maintaining contact with home via the Internet, and/or previous knowledge of the host culture) greatly affect their transitions to Japan. Notably, participant adjustments were made on several different levels, including physical, social, and attitudinal.

研究分野：コミュニケーション学

キーワード：異文化コミュニケーション 障害学 適応

1. 研究開始当初の背景

異文化コミュニケーションの分野では、外国での生活適応に関してこれまで多くの研究が蓄積されている。彼ら・彼女らの立場は、留学生 (ex., Branbant, Palmer & Grambling, 1990; Uehara, 1986)、駐在員 (ex., Harvey, 1989)、帰国子女 (箕浦、1984) など、出身国は世界各国からで、そのバックグラウンド、適応状況はさまざまである。

一方 1999 年から (株)ダスキンはアジアから 20 代～30 代の障害をもつ当事者たちを数名日本に招き、研修生として (以下「ダスキ研修生」) 障がい者の自立生活 (以下「IL」) を学び、研修終了後自国にて活躍できる障がい者リーダーの育成事業を展開している¹。日本障害者リハビリテーション協会 (以下「リハ協」) が 1998 年から研修実施を委託されており、日本語と日本の障がい者福祉の現状を約 10 か月間学んでもらうため、昨年 9 月ごろ募集を開始、2012 年 4 月に応募者 254 名の中から第 14 期生 7 名が決定した。2012 年 9 月 2 日にダスキ研修生がアジア各国 (カンボジア、マレーシア、フィリピン、モルディブ、ネパール、ミャンマー、台湾) から来日し、9 月 4 日にダスキン本社で開講式が行われた。研修生たちは、12 月まで新宿戸山のりハ協で日本語習得のための集中講義、日本生活への導入となる各種手続きなどを経て、1 月から日本全国の研修先へ派遣され半年あまりの研修生活を送ったあと、帰国直前に再度りハ協に戻り、研修全体の振り返り・まとめを行う。

ダスキ研修生たちは、これまでの研究されてきた日本への非障害留学生や研修生、あるいは日本語を母語とする日本人障がい者とは違った問題に滞在中直面する可能性がある。外国での適応には多くの要因が考えられるが (例えば、個人的要因、環境的要因など)、「障害」がもたらす適応への影響についてはこれまで全く調査がされてこなかった。

さらに日本での生活への適応に加えて、ダスキ研修生たちは研修後、自国にて障がい者リーダーとして地元コミュニティでリーダーシップを執ることを期待されている。彼ら・彼女たちが日本での研修生活を通して、何を学んで、どのように自国の地域・文化に持ち帰ろうとしているのか、日本の IL についてどうとらえているのか、に

¹ その様子はさながら以前アメリカ型の自立生活運動を学ぶべく、日本から多くの障害当事者や福祉関係者たちがアメリカへ渡り、日本へそのノウハウを持ちかえり地元にあった形に修正・試行錯誤を重ねながら日本型の運動と展開させてきた歴史と似ている。

ついてもこれまで先行研究はあまり無かった。

2. 研究の目的

以上の背景から、本研究の目的は以下のとおりである。

1. 彼ら・彼女らの日本での生活適応のプロセスを明らかにし、その適応に関連する要因を探る。

2. 障害をもった外国人が直面する日常での課題を明らかにする。

3. 研修生が日本での自立生活を通して学ぶこと、特に自国にどういったことを持ちかえり、実践しようと考えているのか、を明らかにする。

3. 研究の方法

エスノグラフィー (参与観察・インタビュー)

(1) 参与観察

ダスキ研修生たちは、9 月～12 月は新宿のりハ協に宿泊しながら、日本語研修、オリエンテーションなどを行っている。この期間に、研究者もりハ協宿泊施設に数回各数日滞在、研修生たちと寝食を共にし、研修・日本語クラスの様子を見学、外出などにも同行することで関係構築に努めながら、エスノグラフィー (インタビュー、参与観察) を行なった。本研究の準備として、すでに研究者はダスキ研修生たちが来日の際関西航空まで出迎え、ダスキン本社での開講式にも参加している。

参与観察者のタイプとしては、観察者としての参加者であり、たとえば日本語の授業に参観している場合、教師から促されれば日本語のネイティブスピーカーとして研修生たちの会話パートナーとして参加した。こういった形でのフィールド参加の利点としては、「見られている」ことへの違和感・緊張感を軽減し、授業へ一緒に参加することによって研究者の存在に慣れてもらい、自然な状態に近づくことである。

参与観察中は、自然なかかわり合いを記述するためフィールドノーツを作成し、データ収集から理論メモをつける。フィールドでのデータには言語だけではなく、対象者の表情や所作、表出された感情などが含まれ、インタビューとは違った「素の姿」、自分では分からない無意識に行っている行為を「第三者からの視点」から切り取ることを目的とする。また研究者 (岩隈) は研修生たちを評価する立場であるりハ協の職員でも日本語教師でもなくニュートラルな第三者の立場であること、研究者自身が障がい者であり海外生活を経験している。

(2) インタビュー

インタビューは 30 分から 1 時間程度の長さとし、共通インタビュー項目とは別に、参与観察によって出てきた疑問・質問などは、個別にインタビュー時に確認した。

はじめの説明

・インタビューの途中であっても中断出来ます。中断しても不利益になることはありません。

・インタビューで語っていただいた内容でも、ご希望のあった箇所があればデータとして使用しません。

リサーチクエスト

・アジア人障がい者の日本への適応プロセスを明らかにする。

・日本の自立生活から学ぶこと・取り入れたいことを明らかにする。

インタビュークエスト(共通質問)

「今の一日の生活について教えてください」(Grand Tour Questions)

「日本の生活で慣れないことや、なじめないことはありますか」

「日本人障がい者の生活について何か気がついたことはありますか」

「日本人障がい者の生活と自分の国の障がい者の生活はどう違いますか」

「日本の自立生活を体験・見学してどう思いましたか」

「自分の国に帰ったとき、日本のILのどこが参考になると感じますか」

「その他(要望・感想・言い残したことなど)はありますか」

・インタビュー中に出てきた情報を判断して、気になる点については、「それはどういうことですか」もう少し詳しく話していただけますか」といった、「開いた質問」を心掛けた。

分析方法

Steps for Coding and Theorization (以下、SCAT)をつかって、文字化されたフィールドノート、インタビューデータを分析する。SCATはマトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに、

1 データの中の着目すべき語句

2 それを言いかえるためのデータ外の語句

3 それを説明するための語句

4 そこから浮き上がるテーマ・構成概念

の順にコードを考えて付していく4ステップのコーディングと、そのテーマ・構成概念を紡いでストーリー・ラインを記述し、そこから理論を記述する分析手法である。この手法は、一つだけのケースのデータやアンケートの自由記述欄などの比較的小さな質的データの分析にも有効で、初学者が着手しやすい方法としても知られている(大谷、2008)。

4. 研究成果

日本にはさまざまな外国人たちが多様な目的で来日、長期・短期に渡って滞在し、

彼ら・彼女らを対象にした異文化適応、異文化コミュニケーションの研究がこれまでされてきた。一方、医学・医療・リハビリテーション分野では、障がい者に関する研究成果が蓄積されているが、日本語を母国語とする障がい者を対象とした研究がほとんどである。つまり社会科学系、医療系の両分野を見渡しても、「障害を持った外国人が(も)住む日本」という視点は欠けている。また日本のILがアジア各国に持ち込まれた後、どのようにローカルに根付こうとしているのかについての先行研究は見当たらなかった。

本研究では、13人の研究協力者にインタビューを行い、そのうち何人かは複数回インタビューを行った結果、まず「一般的な適応」として、食事・気候・衛生面(トイレ・風呂の使い方)など、が挙げられた。しかし研究開始以前に予想していた、日本文化への不適応は、本研究ではほとんど見られなかったのは、特筆に値する。以下のインタビューデータは、研究参加者から述べられた。

暮らしやすいことは一つの理由ですが、福祉の制度がいいことも暮らしやすいことの一つです。台湾の生活はうんざり。この10カ月間でたぶん変わったところがあるだろうけれども...でも、現状の制度で見れば、やはり日本のほうがいいです。私の体の状態と家族の状態では、年金がもらえません。

上記に述べられている、福祉制度の違いだけでなく、日本の先進国としての生活スタイル、安全性、進んだアクセシビリティ、日本人の障がい者に対する慣れ、インターネットを通じての母国とのつながりの保持(ホームシックの軽減)などが、不適応の少なさに関与していた。このことは非障がい者に比べると、障がい者の異文化適応には、これまで異文化コミュニケーションで指摘されている要因(個人の性格、性別、年齢、学歴など)に加えて、ホスト社会(日本)と彼ら・彼女たちの母国との環境の差が(不)適応に大きく影響を与えると考えられる。

グループ研修・個人研修を通して、障害間コミュニケーション(例:ろう者と車いす使用者)が、何人かの研究参加者たちに内在する“Ableism”を変容させていた。

4月にあらためて聞くと、あのときはあのようには言ったけれども、実は障害のことをそれほど好きではないし、障害者と一緒にいるのは少し嫌だ、自分が障害者の仲間と思われることが嫌だったと。けれども、日本で研修し、同じ釜の飯を食うというような経験をしながら障害の人と一緒にいて、全然嫌ではなくなった。本当の意味で障害の治療ができたというようなことを言ってくれる人が何人かいました。そのような自己肯定感ができると自信がつくのかと

思いました。
上記はインタビューデータから見られた「障がい者の一員として見られることへの嫌悪感の変化」の表出例である。

また同じ障害をもった「高齢障がい者」とのコミュニケーションが、彼ら・彼女らのエイジングに対する現実的な、しかし楽観的な見通しをもたらしている様子が、インタビューやエスノグラフィを通して明らかになった。「障害間コミュニケーション」が「横」の関係であるならば、高齢障害者とのコミュニケーションは、「世代間コミュニケーション」であり、「縦」の関係と言える。

さらに本研究から、ジェンダーと障害の関連、特に女性障害者のエンパワメントも浮かび上がってきた。

会社へ行ったときも、女性の障害者の人をもう少し入れたいなと思いました。皆、本当に男の人ばかり。これは日本のどこでも同じだと私は思います。たくさんの方の前で話すとき、男と男が話すことと、女の子と男が話すことは、全く違います。女の子が男と話すとき、男は少し優しく答えます。私が会社に行ったとき、私は聞くだけでした。それで私は今日は何のために来たのだらうと思いました。みんなはいろいろ話しているのに、私はあいさつもしないで帰ることになりそうでした。これでは駄目と私は言い、自己紹介をしました。

女性障がい者の何人かは、人前で話す、意見を求められるといった母国では経験してこなかったことを日本の研修で行い、それまで当たり前と思っていた、Sexismに対して異議申し立てを行っていた。

日本で学んだことを自国に持ち帰る点については、日本の進んだアクセシビリティや福祉サービスを参考にしながらも、自国の文化や風土に合わせて「加工・修正」する必要があると、何人かの研修生たちは考えていた。また日本の障害者運動やILについての歴史を学ぶことで、新しく芽生えつつある自国での障害者運動の方向性を予測し、日本が経験してきた失敗から学び同じ轍を踏まないようにしようと考えていることが分かった。

例えば、研修生の一人は日本の緻密な車いす利用者などの移動困難者に対する鉄道サービスは、几帳面なお国柄である日本だから可能であって、細かいことに無頓着な自国では「不可能」と考えていた。またパーソナルアシスタント(PA)サービスは、「人間関係」を重視する国では、ビジネスライクになりすぎるやり方は、受け入れられないだろうから、ローカル文化に合わせて修正が必要だろうと述べていた。

本研究は研究参加者たちの適応には、身体的、社会的、態度的レベルがあることが明らかになり、「障害を持ったアジア外国人の日本社会への適応」と「日本型ILのアジ

アへのシナジー」というニッチなテーマを扱った点に、意義があると考えている。

参考文献

Branbant, S., Palmer, C.E., & Grambling, S. (1990). Returning home: An empirical investigation of cross-cultural reentry. *International Journal of Intercultural Relations*, 14, 387-404.

Harvey, M. (1989). Repatriation of corporate executives: An empirical study. *Journal of Intercultural Business Studies*, Spring, 131-144.

Uehara, C. (1986). The nature of American student reentry adjustment and perceptions of the sojourn experience. *International Journal of Intercultural Relations*, 10, 415-438.

大谷 (2008) 4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 - 着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き - .名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学) v.54, n.2, 27-44

箕浦康子(1984)『子供の異文化体験』思索社。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

Iwakuma, M., Okuhira, M., & Nasu, S. (2016, under review). "When I am in Japan, I feel as though I'm not disabled": A cross-cultural adjustment study of trainees with disabilities from Asia-Pacific regions." *Disability Studies Quarterly*. 査読有

[学会発表](計 2件)

Iwakuma, M. (2015, July). An ethnographic study of trainees with disabilities in Japan. Paper presented at Workability Asia, Thailand.

Iwakuma, M. (2016, November). "When I am in Japan, I feel as though I'm not disabled": A cross-cultural adjustment study of trainees with disabilities from Asia-Pacific regions." Paper will be presented at National Communication Association, Philadelphia, U.S.A.

[図書](計 0件)

〔産業財産権〕
出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者
岩隈美穂（IWAKUMA, Miho）
京都大学・医学研究科・准教授
研究者番号：60512481

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者